ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文 北原モコットゥナシ・瀧口夕美　絵 小笠原小夜

イペアンロー！（いただきます）

「ワカメのヤマウ」　夏にぴったり冷たい汁物

今日はヤマウをごしょうかいします。ヤマウはヤムオハウとも言い、冷たいオハウ（汁物）のことです。

汗をかく季節は水分とともに、塩分を取ることも大事だといわれます。コンブがふんだんにとれる日高地方では夏場、昆布だしと干し魚を使い、塩気のきいたヤマウを食べたそうです。さました塩味のスープは暑い日の食事にぴったりだったことでしょう。

干し魚は、魚がたくさんとれる時期にまとめて作ります。サケやマス、ウグイやキュウリウオなどをいったん火であぶってから、いろりでいぶして薫製にします。

今回はタラの干物を使います。皮や骨をつけたまま干したスケソウダラや、マダラで作るすきみタラなど、干しタラは種類も豊富。塩味のこさは、それぞれにちがいがあり、干しタラの塩味だけで十分な場合もあります。しょっぱくなりすぎないよう、味をみながら作ってください。

ワカメのヤマウ

◇材料（３人分）
- 干しタラ　40グラム
- だし昆布　10センチほど１枚
- 水　900cc
- 塩蔵ワカメ　30グラム
- 青ネギ　２～３本
- 塩　適量

◇作り方

①なべに水とだし昆布を入れ、昆布だしを取る。塩を入れて味をととのえ、さましておく。

②タラは皮や骨がついていればはずし、こまかくさいておく。

③塩蔵ワカメは水にひたしてもどし、食べやすい大きさに切っておく。

④昆布だしに②を入れておき、タラの身が好みのやわらかさになったところで、③を入れる。青ネギの輪切りをちらしてできあがり！　氷やキュウリのスライスを好みで入れてもおいしい。

カンピソシ（本）

「アイヌ　もっと知りたい！　くらしや歴史」

北原モコットゥナシ、蓑島栄紀監修

この本には、「ヤウンモシリ（陸にある世界）」ということばがたくさんでてきます。「北海道」をさしていますが、アイヌ自身が、自分たちがくらす土地をこう呼んできました。

ヤウンモシリに対し、海のむこうにある「レプンモシリ（おきの世界）」にもさまざまな民族が暮らしており、アイヌは、船をあやつり、北（サハリン）のニヴフ、南の和人（アイヌからみた日本人の呼び方）と自由に交易をして、その仲立ちをする時代もありました。

たくさんの生き物がすむ海や森、きびしく長い冬、過ごしやすい夏が、アイヌのくらしを形づくってきました。アイヌの未来のために行動した人たちが、たくさん登場するのも読み応えがあります。

アイヌは、この日本列島に生きる和人とは別の文化を持つ民族です。夏休みに、いろんな背景を持つ人のくらしや歴史にふれ、考えるヒントにしてみてください。

（2018年、岩崎書店、3960円）

一方的なイメージや差別的な呼び方を改め、相手を尊重した言葉が大切

ニュースフムフム

「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

アイヌ民族？　アイヌ人？　何と呼ぶ？
優劣ない呼び方で

アイヌ民族が話題に上るときには、「アイヌ」「アイヌの人たち」「アイヌの方々」などいろいろな呼び方が使われます。かつては「アイヌ族」や「アイヌ人」「土人」と言われることもありました。

ほかにも人種、種族、部族などがありますね。新聞社などは使い方を注意するようになっていますが、いったい、どの呼び方が良いのでしょうか。

こうした言葉の使い方は、感覚的なものだという研究があります。決まりはありませんが「文明的」と思われている人たちは「○○人」や「○○民族」、反対に「原始的だ」と思われている人たちには「族」「部族」や「土人」が使われています。

地域別では「民族」を使うのはヨーロッパ、「族」や「部族」と呼ぶのはアジアやアフリカ、アメリカ先住民がほとんどではないでしょうか。

仮に日本に住む人を「日本族」や「日本土人」と呼んだとしたらどうでしょう？　もしいやだと感じるなら、そのような呼び方はだれに対しても使わない方がいいですね。

ところで「日本人」とはだれのことを指すのでしょうか。ある辞書には「日本国籍を有する人」「日本国民」と書いてありました。

アイヌ民族、琉球（現在の沖縄県）の人々、東京都の小笠原諸島にずっと前から住んでいる人（ハワイなどにルーツを持ち、現地では欧米系島民などといわれているそうです）は、明治時代に日本国籍を持ちました。

今ではもっとさまざまな人が国籍を持っています。日本人は国籍を持つ全ての人を指します。

このため、本州などで日本文化をつくってきた人々を指すときには「和人」を使います。ただ「人」や「民族」には優劣のイメージがあるとして「アイヌ人と和人」「アイヌ民族と和民族」というように、同じ呼び方にしようという提案もあります。

世界にはいろんな人々の集団があります

きょうのことば

アイヌ人

私の知人には「アイヌ人」という言い方が好きになれないという人がいます。学校で「差別語だから使ってはいけない」と教わることもあるそうです。

私は差別的とまでは思いませんが、小学生のころは違和感がありました。なぜかというと、アイヌは「人間」という意味なので「アイヌ人」は同じ言葉がつながっていることになります。「男性マン」とか「花フラワー」という言葉があったら変ですよね。

「タイ人」「オランダ人」のように、「○○人」は外国の人に使うイメージもあります。そのためでしょうか、「アイヌ人」という表現からは「日本の外」に置かれている感じを受けるのかもしれません。

土人とウタリ

ある国語辞典で「土人」の項目を引くと、①その土地の人②未開の地で原始的な生活をしている人と書いてありました。

②のように、人が暮らしているところを「未開」と呼んだり、原始的な生活と言ったりするのは失礼だと思います。

①には一見、悪い意味はなさそうです。ただ時代が進むに連れ②の意味合いが強くなり、今では差別的表現とされています。

昭和初期、旭川市でアイヌの女性が万引の疑いをかけられた際、取り調べをした警察官（和人）が「このアイヌ！」と言ったことがありました。民族名の「アイヌ」もぶじょくの言葉として使われ、多くの人が傷ついてきました。そこで大正時代から「ウタリ（身内）」という言葉も使われるようになりました。